

哲学と体育——人体と天体の円運動

棚次正和

Philosophy and Physical Education: Circle Motion of the Human Body and the Celestial Bodies

Masakazu Tanatsugu

日韓共催の2002年ワールドカップが6月に迫り、本稿を執筆中にもソルトレークで冬季オリンピック大会が開かれています。筆者のような浮き世離れた人間でも、スポーツはたいへん興味深いものです。競技者や選手は、科学的知識と技術の体系に支えられて日々ハードな練習を積み重ね、肉体面と精神面の双方を鍛練することによって、然るべき成果や成績を挙げようと懸命に努力しています。賦与された能力を最大限に発揮することを目指す生き方として、人々の注目と喝采を集めるのも当然なことです。哲学や宗教などについて机上で思索している人間には、羨望の念すら覚えるほどです。何か人生の意味を覆い隠している不透明な皮膜を突き破って、明確な目標にひたすら邁進している姿は、心技体が統一された華麗な美の典型を見ているような印象を禁じえません。

ところで、ある時、知り合いの体育教官が、ふと筆者につきのような言葉を漏らしたことがあります。「技術の向上を目指しているとはいえ、来る日も来る日も練習を繰り返していることに、一体これは何なんだろう、と思うことがありますよ。」不意打ちを食らってしまいました。こうした人生哲学的な問いには、やはり人生哲学的に応答せねばなりません、

残念ながら筆者にはその資格も能力も持ち合わせておりません。せめて、体育やスポーツと人生との関わりを、素人なりに夢想してみたいと思っております。

1. 人体の構造と円運動

われわれ人間は、ほぼ共通した存在構造を持っていると考えられます。存在構造という表現は、耳慣れないかもしれませんが、要するに人間の存在構造は、一般には心と体から成り立っていると言われていています。人間存在の構成要素としては、少なくとも心と体、つまり心身の二元を考慮せねばなりません。心身二元論的な見方は、常識的な見方とも矛盾しませんし、その捉え方に異議を唱える人も少ないでしょう。しかし実は、思考する不可分の実体としての精神と、延長（拡がり）のある実体としての物体とが、どのようにして結合しているかは、デカルトの場合にも必ずしも解決されている問題とは言えません。不可分な精神が分割可能な物体に結びつくということ自体が、すでに矛盾した話です。精神（心）がどこに存在するかという問いは、そもそも精神は分割可能な場所には存在しませんので、ほんとうは問いとしては成立しえません。ここから、理論上では不可分な精神と

分割可能な物体とを結合するための場として、神のような別の実体が要請されるわけです。このように、心身二元論は、哲学的には厄介な問題を孕んでいます。常識的には心身は何の矛盾もなく結合しているように見えます。心と体の他にもう一つ別の次元を考慮に入れて、人間を三重の次元の重層構造として捉える必要があるというのが、筆者の考えですが、ここではとりあえず、心身二元論の立場で考えることにします。

人体の実存的構造は、象徴的には天と地の間に立っている姿として描くことができます。つまり、大地を踏みしめながら天空を仰いでいる姿が、体の典型的な形です。この人体を構成する中心軸となるものが、脊柱（人体の中枢部と言える脳の延髄に脊髄が繋がり、それを脊柱管が覆っています）であり、中心軸は頭部・胸部・腹部という三つの部分から構成されています。頭・胸・腹という三部構成の中心軸に、両手足、つまり四肢が付いているというのが、人体の基本形と思われれます。地を踏み天を仰ぐ人体の実存構造において重要なのは、まず中心軸が揺るがずに安定していることでしょう。何事をするにも、中心軸がぐらぐらしないというのが先決です。背筋を伸ばした姿（正確にはS字状で、バネの働きがあります）、腰の安定した姿勢、要するに中心軸が不動の姿勢が理想形とされるのは、然るべき理由があります。余談ですが、心の場合も同様で、意識が中心から外れている時には、苦しみや悩みが生ずるものです。苦しい時には、さっと意識を中心に戻せば、不思議にもそのとたんに苦しみは軽減されます。それで、上述のように、頭部・胸部・腹部の三部構成の中心軸に四肢が付いている姿を人体の基本形と考えることにします。この基本形は、いつも静止状態にあるのではなく、眠っている時以外は（あるいは眠っている時でさえ、寝返りを打つなどして）、何らかの仕方

で動いているのが常です。したがって、体育

やスポーツの基礎的な部分をなす運動について考える前に、人体の基本形から、どういう運動が生まれうるかを、可能性として想定しておく必要があります。

ちょっと奇妙な思考実験ですが、内臓の動きや気血の巡りなどは別として、頭部・胸部・腹部の中心軸に四肢が付いた人体の基本形が行ないうる運動の総計を考えれば、蚕が口から糸を吐いて周囲にマユを形成するように、人体も行ないうる可能な運動を総計すれば、まるで人体の周囲に無数の円を描くように想定することができます。例えば、両腕は左右それぞれに腕の付け根を支点（中心）にして半径60～80cmの球形を可能性として描き、また両脚も同様に左右の付け根を支点に半径60～80cmの球形を可能性として描きます。のみならず、頭も首根っこを中心に回転しますし、頭・胸・腹の中心軸も、腰を中心に前後・左右に動く運動の総計は球形を形成することになります。このように考えると、運動する人体の形姿は、中心軸に四肢が付いた基本形が描きうる運動の総計として幾つかの球体を想定したほうがよいと思われれます。あるいは、その幾つかの球体を総括するものとして、人体を一大球体と見なすこともできます。「人体は球体である」とは、まことに奇妙な言い方ですが、自然界の事物の中には、重力や空気や水や風の作用を受けた結果、環境に適応した理想的なフォルムとして円形や球体ものが数多く存在しますから、人体球体論は、必ずしも荒唐無稽な説とは言えません。それに、そもそも、われわれが住んでいるこの地球自体が、公転面に対して23.5度傾いた地軸を中心に自転している球体です。以上の考察を踏まえて、下に有名な人体図を二つほど掲げておきます。

つぎに、人体による運動のメカニズムを考えてみることにします。運動のメカニズムといっても、運動力学などに基づいた科学的な説明を試みるわけではなく、たんなる素人の

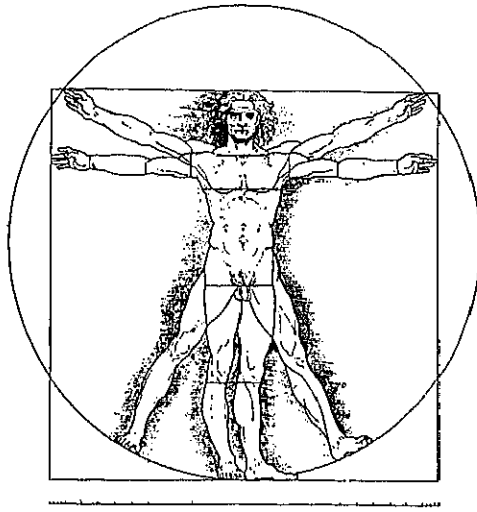


図1 レオナルド・ダ・ヴィンチの素描

言い分ではしかありません。さて、人間が他の動物とは異なって直立二足歩行しているということは、たぶん決定的に重要な事柄になるはずで、直立二足歩行とは、四つ足の動物の前足（脚）が解放されて両手となり、後足（脚）で中心軸を垂直に支えながら直立姿勢を保って歩くことだ、といちおう説明できますが、問題はその意味です。一般に、自動車や自転車などの構造は、四つ足の動物をモデルにして、イメージ的には前脚と後脚がそれぞれ前輪と後輪となり、そこに頭・胸・腹という中心軸が水平方向に横たわっているという形です。人体における前脚の解放としての手の使用が、道具製作や火の利用や大脳の発達をもたらしたことは、周知の事実です。たしかに、直立二足歩行する人間は、前後、左右、上下など比較的自由に運動することができます。とはいえ、ピューマのように地を疾走できるわけではなく、鷹のように空高く飛翔できるわけでもありません。人体の運動にはいわば実存的な制約があって、頭・胸・腹の中心軸に四肢が付いている基本形から、さ

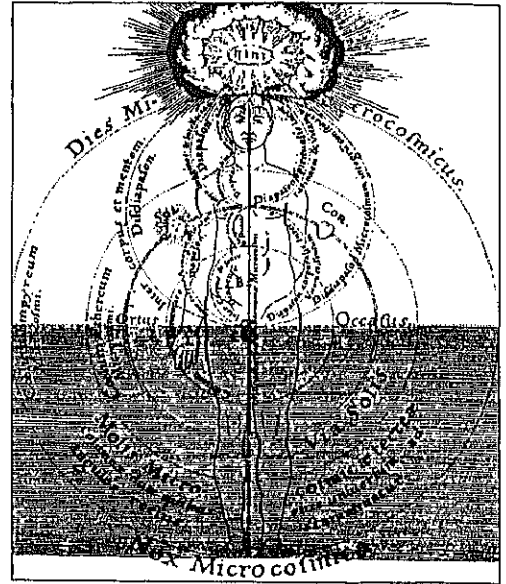


図2 R. フラッド『両宇宙誌』の挿絵

きほど素描した諸運動の総計としての球体の内部で多様で複雑な運動が展開されると考えられます。うまく説明できませんが、人体の外面的な動きは、特定の身体部位を支点にした円運動——厳密には円運動でなくても、変形した円運動やその部分としての振り子運動——の合成のように見えます。日常生活での基本動作、例えば、歩く、走る、飛ぶ、跳ねる、坐る、屈む、横たわる、立ち上がるなどの動作を解析していけば、どこかにそれら一連の動作をそのつど支えている点が存在し、それら数多の支点によって数多の円運動や振り子運動が連続的あるいは不連続的に発生して、相互に連結し合っているように思われます。たとえ直線的に動く場合でも、その動くという所作を成立せしめている下位の運動を分析すれば、ほとんど無数の円運動が複合しているように思われます。歩く動作には、少なくとも脚を上げ下ろしする動作、踏み込んだり蹴ったりする動作、腕を前後に振る動作などが不可欠ですが、そこにも無数の円運

動や振り子運動が関わっているはずですが。

人間が直立二足歩行するという事実と、人体の運動が無数の円運動や振り子運動から成るということは、決して矛盾することではありません。たぶん直線的に進む運動は、それ自体としては自己完結することではなく、何かの抵抗に出会って逆方向に戻る運動を伴う傾向があるのではないかと考えます。慣性の法則に従って、人体の運動が一定方向に直線的に進み続けることは、実存的制約（地球が球体であることも含め）から不可能となります。むしろ、前への運動は後への運動を伴い、右への動きは左への動きに反転し、上への跳躍は下への降下を必要とするのです。こうして、人体の運動は、地を踏みしめ天を仰ぎ見る人間の実存構造をベースに多彩な円運動やその変形運動が展開されるわけです。人体の基本形が描きうる運動の総計が「球体」に近いとすれば、そこから展開される多様な運動も円運動の合成と見ることができるのです。

いま述べたような「人体球体論」は、常識的には受け入れ難いかもしれませんが。しかし実は、太古の昔から、人体を球体や卵形と考える見方はあったのです。だいいち、人体の中心軸を構成している上部の頭の形態が、球体です。シュタイナー教育で知られている R. シュタイナーなどは、頭部を球体に、胸部を全世界の巨大な球体の断片としての三日月形に、そして四肢をその巨大な球体の半径に通じるものに見立てているほどです。頭部は人体の最高位にある部位ですから、しばしば靈魂の象徴とされています。つまり、「あたま」は「たま」（靈魂）の象徴であり、その形態は「たま」（球体）なのです。ここから、おそらく「球技・球戯」が有しているであろう靈魂的な意義も論ずることができるでしょう。グアテマラに住むキチエー族はマヤ文化の後継者ですが、その神話「ポボル・ヴフ」には、二人の若者が地下世界（冥界）に下り、幾多の試練を潜り抜けて、地下世界の連中と球技

をする話が出てきます。直径15cm のボールを相手方の壁の真中にある環に通すと勝ちになるという球技です。なぜわざわざ地下世界に下りて行って球技をするのでしょうか。勝負事としての球技は、どうも「たま」（玉＝頭＝魂）の争奪に直結している事柄のようです。勝ちとは、冥界にある靈魂の奪回であり、それは即ち死者の蘇生を意味するのでしょうか。玉遊びは、魂遊びの起源を持つのです。球技がすべてそうした秘義を帯びているとも言えないでしょうが、そのような観点から球技を見直してみれば、思わぬ発見があるかもしれません。

2. 体育・知育・徳育

ところで、教育には少なくとも体育と知育と徳育があります。これらは相互にどんな関係にあるのでしょうか。ここでは特に、教育における体育の位置づけが問題となります。とりあえず、体育は心身のうち「身」のレベルの育成に関わるものと見ますと、知育と徳育は、心身のうち「心」のレベルの育成に関わるものとなります。心の働き、あるいは魂の様態は、知・情・意の三つに分けられるのが普通ですので、主に知的思考の育成が知育、感情と意志の育成が徳育ということになります。しかし、このような言い方では、教育における体育の役割を十分に説明したことにはなりません。体育が知育や徳育を行なうための基礎や土台となるべきことには異論がないでしょう。体育が目指すところは、しかしそれだけに止まらず、知や徳の体育化のようなことをも含んではいないのでしょうか。「スポーツマンシップ」や「心技体」などの表現には、知育や徳育で養成したものを現実に具現化する、あるいは肉体化するということが含まれているように見えます。知や徳の体育化とは、要するに知や徳の肉体化に他なりません。したがって、体育とは、知育や徳育の下部的な基礎を作るばかりではなく、知育や徳育の現

実的な具体化をも視野に取めた教育であると
考えられるのです。

古代ギリシアのポリスにおいて青少年が受けた教育は、読み書き、算数、ムッシケー（音楽・文芸）、ギュムナスティケー（体育）などでした。プラトンはイデア論で有名な古代ギリシアの哲学者ですが、『国家』篇の中で師のソクラテスにつぎのように語らせています。即ち、理想国家を守護する人間（兵士や統治者）を養成する教育として、魂のためのムッシケーと身体のためのギュムナスティケーが必要であり、ムッシケーのリズムと調べが何にもまして魂の内奥へと深くしみ込んでいくことを説いた後で、ソクラテスは、多様さは放埒や病気を生むが、「単純さは、音楽においては魂の内に節度を生み、体育においては身体の内健康を生む」（*Respublica*, 404E）ことを指摘し、単純な食事や生活法を奨励しています。そして、国の守護に当たる任にふさわしいのは、知を愛する要素と気概的な要素とが調和した人間であり、「音楽・文芸と体育とを最もうまく混ぜ合わせて、最も便宜な仕方ですこれを魂に差し向ける人」（*Respublica*, 412A）であるということです。このような古代ギリシアの教育理念は、たぶんヨーロッパ中世のキリスト教世界においても部分的には継承されました。例えば、高等教育での一般教養の総称としての「リベラル・アーツ」には、言語に関する三科（文法・修辭法・論理学）と、数に関する四科（算術・幾何・音楽・天文学）の自由七科が含まれていました。算術・幾何・音楽・天文学の四科はすべて、宇宙と人間の間にあると想定される本質的関係を、数や比率や図形、音階（調和）やリズム、時間や惑星軌道などの観点から捉える学問であり、リズムや調和や円運動などの完全な表現を目指す体育とは根底で繋がっていると考えられるのです。

また、プラトンは、著作『ティマイオス』の中で上述の議論に通じるようなことを説い

ています。その著作では、神的な知的制作者がいかにして宇宙や人間を秩序づけて創造していったかが、まさに宇宙規模で論じられています。宇宙や人間の創造過程において、人間の構成要素として靈魂的要素のみならず質料的要素が混ざり合った結果、叡智や魂が肉体の制約を被った現今の人間の実存構造が成立したということです。興味深いことは、宇宙創世論と人間成立論とが照応しており、病気に罹った人間が本来の姿に立ち戻るためには、宇宙における天体の循環運動を観察するよう勧められていることです。例えば、視覚の目的が、天体（神々）の循環運動を十分に観察して、それを模倣することによって、われわれの思考の回転運動を正常なものに立て直すことにあることが説かれたり（*Timaeus*, 47B, C）、また、物質を構成するエレメント（地・水・火・風など）の不均衡に起因する身体の病気であれ、叡智が欠けた魂の病気（狂気と無知）であれ、それらに応じた世話と教導が必要であり、神的な「万有の調和と回転運動に学んで矯正し、こうして観察するものを観察されるものに似せる」（*Timaeus*, 90D）ことによって、最も善き生を完うせねばならないことが説かれています。

プラトンに限らず、古今東西の神秘主義的な思想では、人間を霊・魂・体という三重の次元を具えた存在と見るのが普通です。古代ギリシアでは、ヌース（霊の叡智）、プシュケー（魂）、ソーマ（体）の三重です。霊は不死なるもの、魂と体は死すべきものであり、人間はこの両方の性質を同時に有しています。霊それ自体は本来は不死で完全であり、病気にも無関係ですので、病気の治療法は、魂と体の歪んだ関係をいかにして調和した関係に回復させるかが鍵となります。プラトンが勧める天体の観察は、身体と靈魂の双方の次元に関わる事柄です。とすれば、太陽や月や諸惑星を初めとして、われわれに馴染み深い宇宙の天体に対する観察は、身体において

天体の循環運動を模写すること、魂においても天体の循環運動を模写することの双方を含んでいることになります。これは実際上はどのようなことでしょうか。

思うに、循環運動や円運動において肝心なことは、中心へ帰一する運動と、中心から展開する運動という逆方向の二重の運動ではないでしょうか。言い換えれば、求心運動と遠心運動の統一です。正直に告白すれば、いかにして円や循環が成立するかに関して、筆者はほとんど知識を有していませんが、少なくとも求心と遠心という逆方向の二重の運動が一つに統合されない限り、円や循環は生まれないのではないかと考えます。この求心（中心への帰一）と遠心（中心からの展開）とが統一された運動は、身体と魂の双方に関わるものです。プラトンの見解では、身体よりも魂の方が存在論的に高次元に属しますが、魂が身体からの影響を被って、しばしば混乱する事態に陥ることは、われわれが現実体験しているところです。

それでは、身体と魂の双方において、この求心と遠心は、どういう事柄として考えられるでしょうか。実は、これこそ、宇宙における人間の位置や、人生が有する意義に関わる重大事なのです。中心に帰一する求心運動は、絶対者（宇宙の根本原理、究極的なもの）に人間が直接するような事態を指し、逆にその中心から展開する遠心運動は、そこからこの現実世界へと立ち返る事態を示しています。哲学的にも宗教的にも、これら二重の運動の統一が理想的な有り様とされます。求心と遠心の関係は、還帰一流出、上昇一下降、往相一還相、まつろひ一さきはえ、などと呼ばれています。こうした求心と遠心を統合する際の要となる中心へと、おそらく体育や知育や徳育は収斂していくのだと推察されます。この中心こそ、身体の育成としての「体育」と魂の育成としての「知育・徳育」とが最終的に志向しているものです。しかし、中心は、そ

の中心という本性のゆえに、通常は隠されています。はたして、この中心とは何でしょうか。それが問題です。

3. 心技体の統一 —— 円形と球体

いま提起した問いを抱きながら、さいごに、心技体が統一した姿を円形や球体という象徴図形と関連づけて考えてみたいと思います。ここで登場するのが、合気道開祖の植芝盛平翁です。ご存知のように、植芝翁は武道の神様と呼ぶにふさわしい人物であり、武道の奥義を究めたところに宗教的悟境と同じ風光が開けました。つくば市の北東に位置する石岡市の北隣りに岩間町がありますが、その駅舎近くの小森にひっそりと合気神社が鎮座しています。植芝翁がかつて疎開した土地に創建した神社です。

植芝翁によれば、合気道は、宇宙の根元（宇宙大神）の営みの全徳が現れた道であり、その根元から水火二元のむすびによる宇宙創成の全展開を威儀整然として一身に収めた道であるということです。それは時間も空間も腹中に胎蔵して、気の交流を最も尊重する「宇宙みそぎの大道」とも言われます。口述筆記による「武産合気」や「合気神髓」が残されていますが、一読速解できるような書物ではありません。筆者の関心をそそるのは、プラトンの場合と同様に、宇宙と人間との間にその成り立ちや仕組みに関して根本的な照応があることを見抜いている点です。宇宙創造活動の全展開は、宇宙大神（天之御中主神）とその火水二元（高神産巢日と神産巢日）のむすびの働きによって生まれますが、その宇宙大神の大御心が現れたものが、「一靈四魂三元八力の分業分身」としての人間であるとされます。難しい話は横に置くとして、植芝翁は、例の中心に関わる事態を、「天之浮橋に立たして」という表現でも示しています。それは宇宙の中心に立つことですが、宇宙の中心に立つて（神話的には天之御中主神となって）、世

を立直す役目のある道を進むという意味がこめられています。宇宙の中心に立つこと、それは火と水の十字の姿となること、天と地の緒結び、自分と宇宙の緒結びを実現することだと説き明かされます。「みそぎ」が邪気を祓って中心に帰一する局面を表すとれば、逆にその宇宙根元から言霊の妙用が展開されたものが「合気の技」です。したがって、合気の技は、それぞれがそのまま古事記の神々が顕われて働く「神の武」となります。植芝翁の言葉を幾つか引用してみます。

「合気道の極意は、己れの邪気をはらい、己れを宇宙そのものと一致させることにある。合気道の極意を会得した者は、宇宙がその腹中にあり、<我はすなわち宇宙>なのである。」

「天地の呼吸に合し、声と心と拍子が一致して言霊となり、一つの技となって飛び出すことが肝要で、これをさらに肉体と統一する。」

「左足を軽く天降りの第一歩として、左足を天、右足を地とつき、受けることとなります。…〔中略〕…左は発し、右はこれを受ける、物と心を受けて生むのは女であって…〔中略〕…」つまり、右足は自転公転の大中心、左足は千変万化を生ずるのです。また、「人間の力というものは、その者を中心として五体の届く円を描く、その円内のみが力のおよぶ範囲であり、領域である。いかに腕力が自慢の者であっても、己れのその円の範囲の外には力がおよばず、無力となってしまうものである。すなわち、相手をその者の力のおよばぬ円外において抑えるならば、相手はすでに無力ゆえ、人指し指であろうと、ゆび一本をもって容易にこれを抑えられることになるわけである。…〔中略〕…己れはたえず円転しつつ、なお己れの円内に中心をおき、そして逆に、相手を相手の円外に導き出してしまいさえすれば、それですべては決してしまうというわけである。」こうして、「武とは戈（ホコ）の争いを止めさせる」ことであり、真の武道は敵のない「愛の働き」となるのです。

以上の引用は、武道の達人のみがよく語りうる世界でしょう。筆者の分際に応じた話をせねばなりません。心技体に関しては、まず心と体を媒介するものが気であることを注意したいと思います。気とは合気の気でもありますが、一般には気功のように呼吸法との関連で言われることが多いものです。ただし、気（インドではプラーナと言います）の呼吸は、肉体の呼吸よりも前の段階のことであり、肉体に現れる以前の生命エネルギー的な呼吸ですので、まさに体と心とを媒介する働きです。この気を練ること、「気」の練成が「技」の錬磨に通じるのではないかと思います。技とは気と同調（即ち合気）の練成が特定の形や型に具体化したものと言えないでしょうか。気の練成は、心と体を媒介するその働きを通して、心を体に繋ぎ、体を心に繋ぐことを鍛練しているように見えます。この気の練成によって、心の体化と体の心化が促進され、その修練と反復練習を通して技が完成し、また多彩な技が自在に展開されるのでしょうか。植芝翁は、合気の多彩な技が展開する際の基本を「円転」と捉えているようです。円形や球体は、基本形や完成形の象徴です。心技体の統一（図形的には三角形）を、心を体化し、体を心化する気の練成と技の錬磨との統一だと理解しますと、究極の問題は、その心技体の統一を可能ならしめる場が何かということになります。植芝翁の場合、それは「中心」の問題になります。

端的に言えば、中心とは宇宙の根元（宇宙大神）です。宇宙の中心であるとともに、自分の中心でもあります。誤解してならないのは、自分の中心といっても、自己中心的な生き方という場合のそれとは根本的に異なった次元の中心を指していることです。人間の存在構造との関連では、「霊」（あるいは靈性）と呼ばれている次元に関わります。とすれば、心技体を統一せしめる中心は、霊の次元にあるのです。繰り返しますが、この中心は隠れ

ているので、外を捜しても見つかりません。それは各々の存在のど真ん中にあるのです。体育における訓練や練習は、心技体の統一を目指すものですが、そこにはおそらくその統一を可能ならしめる中心への帰一と中心からの展開という宇宙創造論的かつ人間創造論的な意義が秘められているといっても過言ではありません。そのような眼で体育やスポーツの練習を眺めてみると、練習場で多様な円運動を訓練している競技者や選手の背景に、

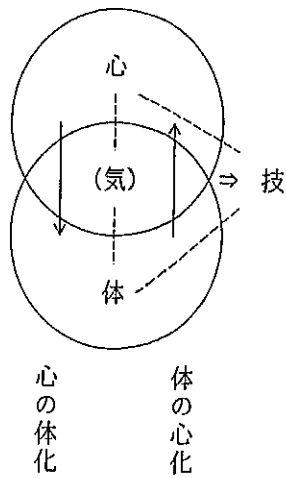


図3 心技体と気の関係

不思議なことに、天空と大地が急に視界に入ってきて、まるで天と地の間に立っている人間の実存構造がくっきりと浮かび上がってきます。大事なのは、円運動ばかりではないでしょう。象徴図形としての三角形（不敗の体勢）や四角形の意義も考慮すべきかと思いますが、もう紙幅が尽きてしまいました。上述したことは、素人が夢想したことです。夢想が伝染しないうちにお忘れ下さることを願います。

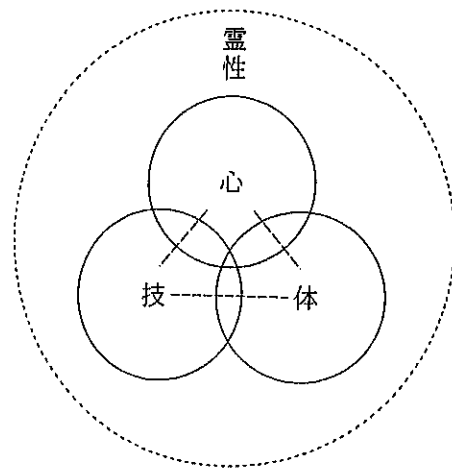


図4 心技体の中心=靈性